

学会誌と学会の発展のために

Further development of the RNSJ and its journal

太田 勝正

Katsumasa OTA

東都大学沼津ヒューマンケア学部

Faculty of Human Care at Numazu, Tohto University

学会誌の発行は、学術集会の開催と並ぶ学会の重要な事業の一つです。本学会は任意団体としてスタートした当初より『日本放射線看護学会誌』を刊行し、学会発足 13 年目を迎える 2024 年時点で、計 12 巻 17 冊を発行してきました。

学会誌の発展を振り返ると、第 10 巻第 1 号（2022 年）から冊子体からオンラインジャーナルへ完全移行し、学会ホームページのみならず Medical Online や J-STAGE にも公開することで、広く情報発信を行ってきました。また、論文投稿については、よりタイムリーな掲載を実現するために 2018 年度から随時投稿システムを導入し、2020 年度からは年間 2 冊の発行体制を維持しています。学会誌が、会員の皆さまのエビデンスに基づく看護実践や新たな研究の手がかりとして活用されることを願っております。

さて、2021 年度の巻頭言「原子力災害だけでなく放射線診療も担える放射線看護を」では、それまでに投稿された論文のテーマを分析し、原子力災害に関するものと放射線診療に関するものがほぼ同数であることを報告しました¹⁾。本学会は、「医用放射線利用に伴う看護」と「被ばく医療における看護」の二つの領域を柱としており、それぞれが機能していることを示す結果でした。今回、直近 4 年間についても調べましたが、大きな傾向の変化は見られませんでした。一方で、看過できない事実も確認されました。

2024 年の 1 年間について、医学中央雑誌 web 版で「看護」と「放射線」のキーワードで原著論文を検索したところ、放射線看護に関連すると判断された論文が 26 件抽出されました。その内訳は、放射線防護に関するもの 3 件、放射線治療の副反応に関するもの 5 件、放射線教育に関するもの 3 件などでしたが、当学会誌に掲載されたものは 1 件だけでした。一方、過去に本学会誌で扱われたテーマと同様な課題に関する論文が 11 件あり、大学紀要や所属施設の雑誌、他学会誌に掲載されていました。論文投稿先は、インパクトファクターのような雑誌評価指標のほかに、査読の厳しさ、受けた研究助成金による制約など、さまざまな要因によって決まりますが、もしこれらの論文が本学会誌に掲載されていれば、放射線看護としてのエビデンスはさらに強化されたのではないかと考えられました。

ところで、本学会の会員数は近年横ばい、あるいは若干の減少傾向にあります。会員の皆さまの期待に応え、さらに発展させるためには論文投稿数の増加が不可欠です。そのために何ができるか考えてみたいと思います。

一つの方策として総説論文の増加が挙げられます。総説は引用機会が多く、看護界における放射線看護の知名度の向上にも貢献すると考えます。たとえば、『日本看護科学会誌』では毎年5～10編前後の総説が掲載され、概念分析や文献レビューが報告されています。これらは臨床看護上の課題解決の手がかりや次の研究の基礎となるでしょう。一方、本学会誌においては、学会が設立されて間もない時期に放射線看護の専門性についてまとめた「高度看護実践としての放射線看護の枠組みと将来展望」²⁾、およびその5年後にホウ素中性子捕捉療法における看護師の役割等をまとめた「ホウ素中性子捕捉療法の看護実務と今後の展望」³⁾という2編の総説が掲載されたのみです。放射線治療における副反応に対するケアや、画像下治療（IVR）における放射線皮膚炎のリスクへのケアなど、放射線診療における放射線看護の視点からの課題について、総説を通じた最新の知識の提供が期待されます。ちなみに、IVRの副反応をChatGPTに尋ねると、出血・血腫、感染症、造影剤によるアレルギー反応、正常組織の血流遮断による組織壊死などさまざまなものが示されましたが、放射線皮膚炎についてはまったく触れられていませんでした。医療・看護の中に、放射線看護の視点が十分に浸透していないことが窺われます。

最後になりますが、もう一つの柱である原子力災害における被ばく医療における看護についても、さまざまな経験を集約した総説が期待されるのは言うまでもありません。総説の充実、放射線看護という専門性をより明確にし、エビデンスの蓄積と普及につながり、ひいては学会の発展につながると信じます。皆さまのチャレンジを期待しています。

注) 論文の分類は筆者の視点によるものであり、違う見方や数え方があるかもしれません。

引用文献

- 1) 太田勝正. 原子力災害だけでなく放射線診療も担える放射線看護を. 日本放射線看護学会誌. 2021, 9(1). 1-2.
- 2) 西沢義子, 野戸結花, 一戸とも子, 他. 高度看護実践としての放射線看護の枠組みと将来展望. 日本放射線看護学会誌. 2015, 3(1). 2-9.
- 3) 山本由佳, 鈴木 実. ホウ素中性子捕捉療法の看護実務と今後の展望. 日本放射線看護学会誌. 2020, 8(2). 69-78.